

総合的な学習の「表現活動」に関する実践的研究Ⅱ

— 九鬼小学校の場合 —

中西 智子*

小・中学校においては平成14年度より、「総合的な学習の時間」が本格的に実施されている。総合的な学習の授業には、地域の伝統的な祭り事を素材にした活動として歴史的な取り組みの研究、祭り事に関わる人たちの伝承についての研究など、さまざまな視点から展開されており、これらは、子ども自身が日常感じる身近な文化をもっと知りたくて取り組むという「意欲の芽生え」が出發になる。

自分自身や友だち、先生、保護者、地域の人たちと共に、知る喜びや達成感を分かち合える学びの楽しみは、子どもが従来の授業では自覚できなかった側面を自覚できる機会になる。さらにその成果を人へ伝えることで新たな集団との連帯感が生まれ、自分の可能性への緊張感との対峙を経験する。生活圏で自らの存在感を自覚することに繋がる学びの活動は、学校週5日制の学力観である「生きる力」育成の教育活動を展開することとも重なる(註1)。

キーワード：総合的な学習、地域の伝統芸能、表現活動、学校・家庭・地域の連携

はじめに

尾鷲市は東紀州(紀伊半島東部)熊野灘沿岸に位置する中核都市である。『尾鷲絵』に代表されるように江戸時代より林業で栄え、自然に恵まれた良港で水産業も発達した。現在は過疎化と少子高齢化の課題を抱えて、地域活性化を模索する自治体の一つである。尾鷲市では、伊藤允久市長のもと、2001年4月に尾鷲市役所産業経済部 新産業創造課 開発調整室が設置され、積極的に地域活性化へ取り組んでいる。施策の一つとして2002年度には三重大学と東紀州地域連絡協議会を立ち上げ、相互友好協力協定が締結された。

本稿の事例は地域活性化の視点から始まった。筆者と新産業創造課との接点が2001年10月にあり、新産業創造については少子化問題と過疎化傾向の実態を含む話し合いであった。過疎化と少子高齢化で学校の統廃合などの避けて通れない課題については、「教育委員会と地域の人々の連携で将来的な展望の検討が必要である。」という

基本理念のもと、積極的に関係者が動くための具体的な方策が必要であろう、という主旨であった。

次回には筆者から学校の元気と地域の元気を引き出す提案をした。それは、過疎化と少子高齢化の問題を抱えた学校の役割として、地域ぐるみの教育活動へ働きかけることによって「子ども世界と大人世界で、地域に住む幸せの喜びや感動を共有できるような実践」を目指す企画である。沿岸地域ということで、海と山の関係をテーマにした演劇活動を通して、学校と地域が生活と結びついた創造的な教育活動を展開する内容とした。

調査の結果、尾鷲市九鬼町で行われる「元旦に神楽を船上で舞う祭り事」との共同作業が地域の独自性ある主題を共有できであろうと考えた。五穀豊穡を願う獅子舞は多いが、ここでの神楽は船上で獅子が舞う。これは水産業を生業とする地域の人たちの願いが込められた特異な芸能である。

新産業創造課開発調整室から教育委員会へ、学校と保護者の協力を得て取り組む企画内容について打診をすることになった。東利三教育長は即答でこの提案を受け入れ、教育委員会学

* 三重大学教育学部幼児教育講座

学校教育課と生涯学習課の連携体制を整えることを了解した。

開発調整室の室長（2001年度当時）がアマチュア演劇の制作に関わっている関係から、筆者と共に“叩き台”としての台本と絵コンテを作成し、2002年1月に教育委員会へ提出した。教育委員会から『船上神楽』の地元である九鬼小学校へ台本を渡して打診をした。

九鬼小学校からの呼びかけで、2002年3月末に校長室へ全職員と保護者会代表、新産業創造課、教育委員会、筆者が集合した。4月から赴任予定の上野寛人校長も同席し、九鬼小学校は前例の無い取り組みに対して、それぞれの立場から忌憚のない意見を述べ合った。保護者会からは良い機会と盛り上がり、協力させていきたいとのことであった。小学校としては参考になる事例提供を希望する意見もあったが、教職員が“叩き台の台本”を参考に児童と教師との共作の形で台本を作ることを提案した。

その後の話し合いの要点は、以下の通りである。

- ①子どもたちの発想、意見をどのように引き出すか。
- ②保護者と船上神楽保存会の人たちとの協力体制作りの検討。
- ③総合ディレクターの役割（筆者）。

5月には取り組み体制が整い、衣装と大道具はほぼ完成していた。地域では子どもたちが楽しく練習をしているとの話題が広がり、いよいよ神楽部も加わっての通し稽古の機会を設けなくてはいけない、というところまで進んだ。

発端は大人たちが考える「地域活性化のテーマ」から始まったが、結果的には児童が地域の生活を身近な問題として《海と山の共生》を捉え、地域の伝統芸能の真髄を再確認するシアター（上演を目的とする）としての表現活動が展開した。

本稿では、児童と教師を中心に保護者、そして地域の人たちが協力して創りあげた‘一つの実践’の成果について、協力体制を組んだ役割分担とパートナーシップのあり方を検討するものである。

I 伝統芸能と児童の関わり

I-1 継承130年は新しい芸能

尾鷲市文化財専門委員であった伊藤 良氏の祭りに関する調査には、尾鷲市の伝統芸能についての貴重な資料が記されている（文献1）。

例えば、約2千年も続いているといわれる【野田地の山の神】は、農村地帯の山の神は春になると山から降りてきて田の神となり、農作業が終わると山に戻って山の神になるという『神様』を迎える行事である。また、尾鷲湾は外洋への関門であり、【古江の浜の当】のように豊漁をもたらす為の祭りとして鯨など魚の霊をなぐさめ、海難事故で亡くなった人の霊を慰める祭りが中世から続いている。このように、尾鷲市内には現在も古くからの祭事が多く継承されている。

一方で、伊藤氏の調査には取り上げられていないが時代の流れで新しく誕生した芸能もある。九鬼町には130年近く前に、海上へ出て船上で神楽を舞う【船上神楽】が誕生した。

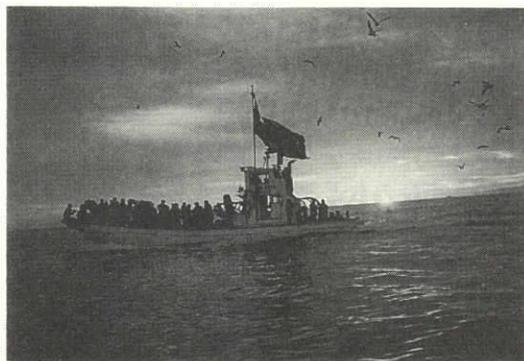


写真1 2002年元旦【船上神楽】の様子

伊勢大神楽阿倉川系統の神楽を舞う船上神楽は、尾鷲市の伝統芸能の中では新しい祭り事である。地域の伝統芸能として毎年、11月末には夕方から週1~2回のペースで稽古が始まり、年が押し詰まると連日続く。そして、元旦には日の出前から船で海上に出て豊漁祈願と海難で亡くなった人の霊や魚の霊を慰めるために、4時間程九鬼湾内を廻りながら神楽を奉納する。

船上神楽は伊勢大神楽の演目と共通している。

ただし、海上で獅子を舞う場合には船の舳先で舞うことから、スペースに合わせて、舞い方も獅子の動きはおさえる。

地域の伝統行事では、家族や身近な人たちが関わる様子を垣間見て、自ずと祭り事へ畏敬の念を持つようになる。また、役割分担はさまざまな約束事が定められており、将来への役割の予感を持ちながら成長していく。毎年その時期になれば関係者は「いい祭りにしよう」と思いながら集まって練習を開始する。

元旦に海上で演ずる船上神楽とは別に、1月5日には魚市場で通しの神楽を演じる。正月に地元へ里帰りをした人も含めて、地域の人たちが「今年の出来具合は」と評価をする認知体制があるようで、演じる人たちには一層の励みとなる。約130年間という継続は、確実に地域の芸能としての質を高めて、九鬼町の文化の形として定着している。

I-2 異年齢の関わりを育む祭りの存在

尾鷲市立九鬼小学校の児童の中には大人と一緒に船上神楽のお囃子の笛や太鼓を担う子がいて、中学生や高校生になると獅子舞いの練習が始まる。稽古の時期になると、稽古場は異年齢男子の顔合わせの場となり、稽古はないが兄に付いて来る年少児もいる。休憩時間には年長者と格闘技のような事をして楽しんでいるが、稽古の間中は静かに正座して観る幼児の姿が印象的である。また、稽古には入れて貰えないが休憩時間になると笛を吹く幼児は、小学生から「あれは遊び」と言われながらも、笛を手放すことはない。

年が押し詰まると、家を離れて暮らす大学生や社会人が稽古に加わり、一層緊張した空気の中で本番前の稽古が続く。稽古終了後にも一人で黙々と練習をする姿、納得できるまで年配の熟達者へ指導を仰ぐ姿などからは、若者の「船上神楽」への深い想い入れが伝わってくる。それは、地域での自分の存在感の自覚と責任感、故郷への愛着からであるといえるのではないだろうか。

II 創作劇への取り組み

II-1 地域に在る教育の視点

現在の九鬼小学校は1987年3月に早田小学校と統合され、2002年度は全校児童15名中、4名が早田町から通う。



尾鷲市九鬼小学校の位置 (註2)

九鬼小学校の児童は生活科、総合的な学習の時間で、魚の生態系や魚のさばき方、干物の作り方、魚付林の存在や海の汚染の原因に関する調査など、近年は漁業関係者の子でさえ家庭では知る機会の少ないさまざまな体験をしながら、知恵を出し合い、多くの知識を学校で学ぶ。先生以上に良く知る《保護者や地域の人たち》が先生となることもある。そして、『漁業が豊かであるには、山が豊かでなければいけない』ということを経験しながら学び、地域での日々の暮らしの中で生きるための知恵や自分なりの創意工夫を、どのように身に付けていくか、ということについて考える機会を得ている。

九鬼町の船上神楽保存会は九鬼町の人たちで構成されており、早田町の人たちには早田町の神楽があったが、現在は途絶えている。このことは、九鬼と早田の児童が抱く船上神楽への内面的認識に差異があるだろう。しかし九鬼小学校では、環境教育として取り組む自然・人・文化の総合体が『漁業が豊かであるには、山が豊かであればいけない』というであり、児童の家庭が水産業に関係していることから、船上神

楽を導入することに賛同した。

教師たちは児童と教師の実情に合わせて、表現活動の骨子(註3)から“叩き台”の台本へ加筆・修正を入れ続け、九鬼小学校としての創作劇【ぶりっこ ひのきっこ】に取り組んだ。

児童15名は、自分たちが住む地域に在る日本の伝統としての芸能文化と、彼らの日常生活経験を一つの作品として混淆していく過程で、創作劇の理解が深まり、練習を続けた。

II-2 質実の充実と支援

一般的に、教えようとする表現活動の内容・方法には目標とする形があると進み良い。一つは、発表の場である。そこで、第8回みえ県民文化祭 子どもフェスティバルへの出場を目指すことになった。

しかしマニュアルが無くモデルが無い場合には、先生や児童が目標に向かって生ずる問題点への戸惑いは大きく、その対応は自身や仲間たちで解決するための工夫に頼るしかない。目標達成に向かって最良の方法を考えながら進む時、保護者会と地域の人たちからの協力が大きな比重を占めた。

さまざまな人からの知恵の結集は、児童にはその一つひとつが自分たちのためであることを実感でき、出来上がりを目指した個人的な努力が観られるようになり、各児童の意識は創作劇に向いていた。台詞を考え、覚え、声の出し方や動きを家庭では一人で練習し、工夫し、学校では仲間との調整をはかりながら努力していた。

体験し知恵を出し合って得た彼ら自身の知識を活かした創作劇は、「劇をすることになってできるかな?と思いました。劇の練習をしている時は、劇の練習がある日はとてもうれしくて、やっている時は楽しかったです(6年女子)。」の如くに、従来には無かった授業の形態に戸惑いがあった(註4)。

通常、兄弟姉妹を含めての15名という学校集団では、阿吽の呼吸の如くに、言わず語らずのうちに了解し合う子どもたちである。彼らが不特定多数の観客の前で劇を発表することは、大きな緊張感があったであろう。十分な練習を

して身体が覚え込むほどの練習を目指した。大人と同様に彼らも舞台の出来栄への不安を抱えていたようである。

「さいしょは、木のせいのマントをひろげるのは、ちょっとむずかしかったけど、練習をしていくうちに木のせいのひろげるところがだんだんよくなって、いきました(3年男子)」

「お客さんはなんにんきているのかなあと、私はしんばいでした。あさになって外に出る時(木の精は三角錐の山から登場)になってお客さんをみると、たくさんの人がみてくれていました。お魚天国も練習したので、お魚天国はしんばいしないでできました。声も大きな声がだせましたし、うごきもはっきりできましたし、練習の時よりも上手にできました。そして、まおうがでてきて木のせいと小鳥が死んでしまうところまでしんばいせずにできました。木のせいと小鳥が生きかえてお魚天国をおどりました。そして、私たちのげきはおわりました。その時私はほっとしました。せいこうしたのでよかったです。(5年女子)」

児童は取り組みの過程で、地域のことを地域外の人たちへ伝えるには説得力のある表現力が必要である、という納得が各自の気持ちに芽生えていった。一人ひとりが伝達力を熟成する必要性を感じて心身を労して舞台をつとめ終えた安堵感は、大きかったと思われる。

児童が「生活科」「総合的な学習の時間」で『表現活動』を充実するために大人世界と共有した時間は、「集団遊び」「集団活動」の如くに、勉強の義務意識から離れた密度の濃い<疲労>と<寛ぎ>であったのではないかと考える。一方、大人には生活と仕事の義務意識から離れた<疲労>と<寛ぎ>を児童と共有することができたようであった。最終段階では中学生・高校生・大学生は大人達が小学生を慈しみ育てる機会へ、積極的に参加して舞台を支えた。

卒業生たちの働きは、彼ら自身にとっても、地域の人たちと“地域の仲間”としての自覚を手にし、関係者の一人として地域の外の人たちへ故郷の意気込みを披露する機会となった。

児童は感想文へ「みんなが生きかえてお魚

天国をおどる時に、中学生も入っておどったので、もっと生きかえた感じがしました(6年女子。)」と記したように、観客の前で緊張しながら精一杯演じる時、中学生は頼もしい存在として感謝されている。

「かぐらの人とかもいたのでこのげきは、いいげきになったと思います。ぼくも大きくなったら、笛やかぐら、小たいこをたたいたり、おどったりふいたりするのかなと思いました。楽やへもどってご飯をたべました(3年男子。)」の様に、船上神楽を【ぶりっこ ひのきっこ】の出来具合と関連して考え、将来の自身との繋がりを思っていたのである。1年生男子は担任へ「舞台の神楽はかっこよかった」と話していることから、神楽の存在を見直す切っ掛けとなった。2年生女子は「九鬼のことでまた劇をしたい」と住む町の誇りを感じており、濃密な人間関係の中にいた感想からの言葉ではないだろうか。

Ⅲ 児童の努力と成就感

児童が九鬼小学校の生徒であることを喜びに感じる瞬間は大きく別けて、①自分のイメージを具現化できる喜び ②家族・地域の人たちが自分を見つめてくれる喜び が挙げられる。喜びを生み出したのは、児童個々の努力の自覚と仲間や大人たちと共に苦労して成し遂げていく手ごたえであったと思われる。

Ⅲ-1 台詞

日常的に暗誦する機会が無い児童は、台詞を覚えて人前で表現することに対して、きまりの悪さを感じるようであった。しかし、言葉のリズムやテンポ、間によって聴く人の心へ染み入る力を発揮する台詞には、身体で覚え込むほどの暗誦が必要である。身体で覚え込むと、自ずと声量は自在になり、仲間との間合いや思いがけない出来事への対応が可能になる。何よりも、伝える趣旨を際立てて表現するには必要である。

プロローグで登場する6年生女子の台詞は誰よりも長く、注目される存在である。大人しく

引っ込み思案と思われる子であるが、教師には責任感の強い努力型の性格と評価されていた。誰よりも早く台本を手放し、練習のたびに台詞が彼女自身の言葉として内在化していく様子が窺えるようになった。彼女の表現力は仲間や先生からも評価され、彼女に相応しい役割であることが自他ともに認められるようになった。そして、彼女の変化が他の児童へ伝染していくように、講堂での練習にマイクは必要なかった。感想文には「最初の私が言うセリフのナレーターのところはきちんと言えなくてないてしまいましたが学校で先生に練習をしてもらったり、いえで練習したり、友だちに聞いてもらったりして上手になりました。劇をやってみて私は、私でもやろう!とおもったらいろいろできるんだなあと思いました。」の文章が記されていた。

例えば、「バンザーイ生きかえったぞーというセリフを言うところが難しかったです。練習の時もそのセリフのところは早かったり遅かったりしてそのタイミングが私は劇の中で一番自分の中で難しかったところです(6年女子。)」
「ぼくはあじとさけぶところがいつも早かったので、ちょっとゆっくりいいました(3年男子。)」と、各人がそれぞれに台詞を自分の思考の中で台詞として捉えようとして、一人ひとりが伝達力を熟成する必要があることを周囲の熱意にも影響されながら、習得していった。

そして、「最初に香奈ちゃんのリレーションです。人がいっぱいいるのに、よくつまったりしないでいえているので、それはよく練習したからだと思います(6年女子。)」と感想文に記した彼女は、本番の舞台で友人が台詞のメッセージを表現した裏にある“友人の自覚”を見抜いて評価したのであった。友人の努力を評価できることは、彼女自身が当事者として解決策を自ら生み出して努力をしていた、ということであろう。

Ⅲ-2 動き

登場する鳥・木・ブリ・魔王の配役は全員で分担した。

動きの検討に入るには「観客」の存在を児童

へ理解させる必要があった。教師は「お客さん」に満足してもらえる内容の充実への課題は教え込まれる性質のものではなく、教師や保護者、船上神楽保存会の人たちの影響下で学ばせる方法しかないと考えた。

ブリが回遊する動きは、担当する教師がブリの衣装でブリになりきって児童と動きを研究した。漁業の専門家たちに囲まれていることもあり、助言は貴重であった。

木の精役の児童からは、ぐるりと廻ってフレイヤーたっぷりの衣装を円錐形の山に見立てる提案があり教師を驚かせた。鳥役の児童は鳥が方向を変えるときの羽の角度は両腕を横一本に広げるより、両腕を斜めにしながら走った方がいいことに気付き、仲間へ伝えた。鳥と木の精の動きは、児童個々が自分のアイディアで舞台を動き廻った。

「山から出て、しぬところがむずかしかったです（3年男子）。」「ブリをいきかえしてよるこぶとき、スキップでとびまわりました（4年女子）。」など、各児童はそれぞれの役柄で自分の問題として取り組み、すっかり役柄になりきっていた。

全員でダンスをする場面では客席から手拍子が入り、「うれしかったね」と会話が弾む。観客は児童が伝えようとしている思いへ手拍子の声援を送ってくれたのであろう。

児童が役を演じる時、魔王以外は生活環境の中で現実に目にしている存在である。児童はこの生活環境に在る生き物を演じるという行為のなかで、環境を考えるようになった。自然現象として見ていたであろう存在には連鎖関係があることに気付いた。例えば、釣り客が残したゴミを片付ける児童の姿について地域の人から学校へ報告があるように、劇の練習を通して自然界への畏敬の念が生まれたのではないだろうか、教師の間で話題になった。

Ⅲ-3 大道具と小道具、衣装

日照りの魔王が魔王らしくということで、魔王役の6年男子と教師が脚立を利用して足場を作り、さらに、それぞれの場面に応じて足場を

効果的な位置へ移動可能なようにと、脚立の足場へ車輪をつける工夫が加わった。見る者には彼が高い所で演技する恐怖感があるのではないかと案じられるが、「平気だよ」と言う。1.5メートル上で演技する彼が役割に挑むには、足場を支える教師との信頼関係が有ってのことといえよう。舞台では「ぼくは、できるだけ大きくえん技をしました。えん技をしている時も、僕はきんちょうしていました。1回音楽がとまったときはちょっととまどったけどうまくできたのでよかったです。」と感想文に記している。彼は高所での演技で音響のハプニングにも対応でき、魔王になりきった。

船上神楽登場の際に用いる船は校長が担当した。船の制作は、船上神楽保存会からの知恵を受けながら舞台で立派に見える船であること、舞台で使い勝手が良いことを目指して努力が続けられた。

三角錐の山（緑の山・枯れた黄色の山・山肌が現れた危機感の赤の山）の制作は、山中から木の精が飛び出してくると効果的であろう、という筆者の提案から生まれ、保護者会会長が担当した。〈5人の児童が出入り可能な安定した山〉は、危険を避けるために本番ごとに開演間際まで調整が続いた。

ブリの衣装は試行錯誤が多かった。最終的には「ミュージカルの『ライオンキング』のようだ」と評価されるほどに、素材の研究とデザインへの工夫が効果を成した。

鳥役はスポンジの帽子を被ることになり、児童が大人の力を借りながら作った。自ら鳥の帽子を作る過程は、少しずつ鳥の気分近づいていくようで、鳥に作り手の個性が表れているようであった。

母親グループによって鳥と木の衣装が用意された。近年既製服が主流になっているが、一人ひとりの身体に合わせて作られる衣装を児童は「私の（僕の）衣装」と大変喜び大切に扱っていた。発表の機会ごとに母親たちのアイディアが加わり続け、最終的に申し分の無い衣装が完成した。

保護者、教師の努力によって出来上がった衣

装や道具は上々の出来栄えとなったが、そこへ至るまでには独自の工夫とさまざまな人からの助言が参考になった。最後の舞台が終わりきるまでの4ヶ月間、大人たちが取り組む姿は児童の視野に入っていた。保護者からは「大人の仕事ぶりを見て、子どもの大人を見る目がかわってきたことを感じる。」「何事にも積極的になってきた。」などの意見が聞かれた。

【ぶりっこ ひのきっこ】の活動を展開するにおいて、大人達には、15名の児童が九鬼小学校に在校した証し（見えることも見えない事も含めて）を築く姿として映った。家庭や地域で学校の話が増すにつれ、関係者全員の士気が高まっていった。周囲の雰囲気から、児童は間違えたらどうしようと意識しながら、自分はどうすればいいのか、自分自身の課題として取り組んでいた。

IV 振り返ること

IV-1 情報誌「学校だより」

学校から届く学校便りは、学校に関わるさまざまな情報を知ることができる。その時々の記事から学校の動きが判り、保護者同士の話題にもなる。【ぶりっこ ひのきっこ】に関して自然発生的に保護者や地域の人たちのネットワークが進み、仕事を休めない親に代わって助け合うなど、強力な知恵袋応援集団となった。熱い思いの児童や教師を支える為に学校で作業をしながら過ごす時間は、充実していた。そして、この時間には学校の動きが的確に手中に入った。

道具類の事が家庭で話題になり助っ人に来る父親、気になって覗きに来る地域の人、学校は皆が出会える場所となった。学校は親同士のコミュニケーションや意思疎通に不可欠である「共に喜び、案じ、適切な対処を話し合う経験の場」となり、大人たちは信頼関係を深めていった。そしてこの様子が学校だよりで紹介されることになる。

学校だよりは、児童自身には周囲の大人から受けている支援の実を確認でき、どのように思われているのか、という判断材料になる。同

時に九鬼小学校区の人々の共同性を子どもなりに捉えていたのではないだろうか。

‘学校をひらく’役割を持つ学校便りの継続は、教師が第三者的に学校を見つめなおす材料にもなった。

IV-2 発表するという事

児童を中心に、共通の目的に向かって関係者が作品をまとめ上げようと力を出し合う中で、協力体制が充実し【ぶりっこ ひのきっこ】は作品として早々とまとまった。

今回の創作劇は、九鬼小学校が従前から取り組んだ環境教育の成果を生かすねらいがある。児童は単にシアターへの取り組み経験が無いだけである。創造活動として表現活動が完成する過程を教育として重視し、同時に上演を目的とするには、振り返りの効果の検討が必要であろうと考えた。

出来栄えを振り返り、反省することによって「自分達の主張を伝える」表現力向上への努力を期待した。そのためには発表の場数を経験する必要がある。この趣旨について大人たちの理解を得ることができた。

観劇経験と舞台経験の無い児童には、場数を踏むという考え方は理解しがたいことであつたかもしれない。観客は保護者なのか、尾鷲市とは無縁の人たちなのか、彼らが演じることと本質的に無関係であろうが、「自分達の主張を伝える」ために意識を集中すれば観客の誰にでも伝わる、ということを経験する必要がある。

児童は彼らが個々に持っている知識や思慮分別を最大限に活用しながら演じ、積極的に自分を表現している。その姿は彼らの努力の成果として観るものに伝わり、感動を与えることは疑う余地が無い。しかし当初、児童には舞台で「自分達の主張を伝えようとする気持」が希薄であるように思われた。

その最大の理由としては、台詞は間違わないが台詞（言葉）の調子に勢いが感じられないことであつた。台詞を多少間違えても台詞が抜けても、伝えたい気持ちが根底にあれば語気で伝わる、という手ごたえは実践の場で手にする性

質のものであろう。

大人達の意見がまとまり、観客圏を少しずつ広げた発表の場を設定した。九鬼小学校へ尾鷲市教育委員会が訪問する機会を最初として、地域の七夕祭り、尾鷲市文化会館：せぎやまホール、最後に三重県総合文化センター：中ホールとなった。発表の都度観客から賞賛され、保護者や教師から誉められながら、次回への反省事項の確認が続いた。

保護者と教師から「最後の舞台が終わって、子どもたちが一回りも二回りも大きくなったように感じる」との意見が寄せられた。

1年生から6年生までの一人ひとりが胸を張って努力をし尽くしたという、各人の充実感は、最後に舞台上で演じた5ヶ月後の感想文から推し量ることができる。

おわりに

生活のために海上で生と死の堺目を知る中で行う漁業は、九鬼の人たちには必要な仕事である。九鬼小学校の児童は、『海と山の共生』で『漁業が豊かであるには、山が豊かでなければいけない』と学んだ。そして、現在も学んでいる。学ぶことが、実は自分たちの町で続いている船上神楽と関連があることに気付き、地域の祭りの意義を知ることになった。それは、船上神楽が地域住民の願いを表現した芸能であることを納得できたからである。

一方、伝統芸能の伝承者は「伝承する自分がいなくなった後も、これと同じ芸能を続けてくれるのは子孫だけである」ということを念頭に、存続のために稽古を続けている人たちである。彼らは九鬼小学校の児童たちと同じ舞台に参加したことで、船上神楽に関わらない子たちとも「一緒に【ぶりっこ ひのきっこ】の練習ができて良かった」と喜んだ。船上神楽保存会は小学校の取り組みへ協力することで、地域に居住する人々の共属感情を集約する大きな役割を果たすことができ、集団活動の成就感を得た。

8月4日、三重県総合文化センターの舞台へ賛助出演した中・高・大学生、社会人の多くが

九鬼小学校と早田小学校の卒業生であった。彼らは「私たちが盛り上げてあげることができるなら」「学校が元気であることが一番嬉しい」と、受験勉強、クラブ活動、アルバイト、仕事などの日程調整をした。遠洋漁業の出発を変更して我が子の、“晴れ姿”を観てから出発した父親もいる。「お父さんが見に来てくれて嬉しい、たくさんの人がいたけど、すぐ、どこにいるかわかったよ（1年男子）」と喜んでいて、学校側には4月から始めた4ヶ月間の創作劇の活動を通して、児童のそれまで気づけなかったこと、保護者や地域の人たちのことなど、多くの発見があった。

最も児童数が多かった1959年の409名から現在は15名である。尾鷲市から遠く離れて住む90歳代の母親（元九鬼小学校教諭）を同行できなかったが姉妹で来たという婦人たちは、「今は15人ですか」と母校の子ども達が精一杯に演じた姿に涙ぐんでいた。今回、尾鷲市教育委員会生涯学習課の職員が積極的に事務局の仕事をこなして応援したのは、九鬼小学校の一層の活性化を期待してのことであったと拝察する。

新産業創造課と筆者の話し合いから始まった試みは、学校・家庭・地域の三者による教育の原点を考える機会となり、子どもたちの元気を引き出す事業となった。学校と地域が相互協力的な関係を築いた本実践は、新たな地域文化の認識へと繋がるであろうと期待できる。

註

註1) 平成8年に第15期中央教育審議会の第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」は、「生きる力の育成」を教育改革の基本方向にかかげた。そして、平成10年告示の新学習指導要領の総則に『生きる力』が登場したことは衆知の通りである。

平成14年から全面実施となる新学習指導要領の大きな特色として総合的な学習の時間の新設が注目されて、各学校での取り組みが発表されている。九鬼小学校においても、地

域に目を向けた授業作りを展開している。

なお、例えば「総合的な学習の時間応援団」として、教育活動支援を行う団体リンク集が文部科学省によって開設されているように、各学校が総合的な学習に多様な取り組みを進めるための情報や、教育実践の報告情報は多い。

註2) 「尾鷲市教育要覧 平成13年度版」尾鷲市教育委員会 より転写

註3) 【ぶりっこ ひのきっこ】ストーリー

九鬼の生活は自然との共生。海からの恩恵(ブリ)を受けながら人々は生きてきた。魚を育てるのは海だけではない。山に振り注いだ雨が山の養分を含み海に流れこむ。海と山もまた共生しているのだ。そしてブリたち。かれらもまた、魚付き林を目印に九鬼崎へと回遊してくるのだ。こういう生活の中で、自然への感謝、魚たちの供養、大漁への祈願を込めた劇である。

註4) 九鬼小学校の表現活動は新聞・テレビなどのマスコミに取り上げられ、児童の周辺では今までに無い話題性が渦巻いていた。そこで、最後の発表を終えた時点で児童の感想を聞くことをせずに、沈静期間(5ヶ月)を置いて感想文を書いてもらった。なお、1年生と2年生には担任が聞き取りをした。

本文中の斜体文字は、児童の感想文及び感想の引用である。

参考文献

- 1 伊藤良「ふるさとの祭り」1980年4月～1982年3月まで尾鷲市広報誌「広報おわせ」に連載された文章をまとめた冊子である。
- 2 松本伸示「「生きる力」をはぐくむ考え方」初等教育資料平成14年2月号(株)東洋館出版社 2002
- 3 山崎正和「藝術・変身・遊技」中央公論社 1975
- 4 竹内敏晴「子どものからだことば」晶文社 1997
- 5 宮川八岐「21世紀型特別活動の実践構想」明治図書 2001
- 6 『教育と芸術／あらたな関係』芸能文化情報センター編 丸善(株)出版事業部 2002

追記

2003年2月、九鬼漁港では35年ぶりの【寒ブリ】の大漁で沸いた。新聞、ラジオ、テレビなどで九鬼漁港の賑わいの様子が紹介され、尾鷲市内では九鬼小学校の児童が演じた【ぶりっこひのきっこ】がブリを呼んだと話題になった。

尾鷲市立九鬼小学校

出演者

1年 東 和輝 2年 畑中美沙紀 3年 川内 絢斗 東 鞠花 田崎 雄介 4年 岩本 歩美 尾崎 紫乃
 5年 川上 舜 片桐由希恵 井島 香澄 畑中 政樹 6年 川上 景子 木村 芳 頼母 香奈
 岡田 晃 7年 川上 翔 尾崎 健太 岩本 有未 片桐亜紗子 川上 香織 村田葉瑠奈
 尾崎 絢 8年 榎本 太祥 加藤 進 宮崎 岳人 田崎 益洋 川上 修平 村田 昇教
 尾崎 健太 川合 章生 宮崎 浩伸 尾崎 剛政 松下 伸和 田崎 克洋 川上 翔
 川内 淑人

目次

① 「ぶりっこ ひのきっこ」

出 演	尾鷲市立九鬼小学校児童	衣装制作	尾鷲市立九鬼小学校保護者会
賛助出演	尾鷲市立九鬼中学校生徒 尾鷲市無形文化財「船上神楽」保存会	道具制作	尾鷲市立九鬼小学校児童、教師、保護者会
原 作	榎本 雅典	作 曲	吉 仲 淳
脚本・演出	尾鷲市立九鬼小学校児童、教師	音 響	尾鷲市立九鬼小学校教師
指 導	尾鷲市立九鬼小学校教師	協 賛	尾鷲市教育委員会、尾鷲市役所

プロフィール

静かな海と緑の山々に囲まれた小さな漁村が、私たちの住む九鬼と早田です。
 私たちの町は、昔からブリ漁がさかんです。しかし、最近はブリのとれる量が減ってきました。ブリは、潮の流れにのり、魚付き林を目指してやってきます。雑木が育った山は、ブリたちの目印なのです。山が荒れ潮の流れが変わると、ブリたちがごなくなります。私たちの演じる『ぶりっこひのきっこ』は、そんな海と山のお話をテーマにつくりあげた音楽劇です。

劇の中には「船上神楽」が登場し、町の人たちは、ブリを供養したり山の再生を祈ります。九鬼や早田では、ずっと昔から、そして今でも、毎年元旦には船に乗って沖に出、日の出とともに船の上で豊漁を祈って「神楽」を舞うのです。船上神楽を舞い、山が生き返り、またブリがもどってくる。そして、九鬼や早田の町が活気づいていけばいいな…そんな思いをみなさまに伝えたいと思います。

九鬼小学校は、全校児童15名のほんとに小さな学校です。こんな大きなステージに挑戦するのは勇気がいりました。保護者のみなさまには、学校へ何度も来ていただき、大道具や衣装を作ってもらいました。地域の方々には、神楽部のみなさまの特別出演をはじめ、様々な協力をしていただきました。

たくさんの方々のアドバイスをいただきながら、みんなで知恵を寄せ集めてできた『ぶりっこひのきっこ』は、小さな学校からの勇気ある発信です。

代表者 上野 寛人

資料 第8回みえ県民文化祭 子どもフェスティバルプログラムより

2002年8月4日 三重県文化会館 中ホール でのスナップ写真



舞台では鳥・木の精・ブリの競演



魔王の力で次々と倒されて…